

フェアプレーを促すルーの下での自由競争が社会の利益を高めるとはいえ、現実には様々な規制の下で、既得権者の利益が守られ、一般国民の利益が損なわれている。規制を廃止することが望ましいが、改革が急激ならば社会的混乱が起きる危険性をスミスは指摘していた。このことは彼がパランスの取れた思想家であることを証明している。

今の日本では政府がなか

やさしい経済学

危機・先人に学ぶ アダム・スミス

先送りには混乱招く

なか改革の必要性を認めないことが多い。何も変えないでいると、結局、突然、大きく変えざるを得なくな

る。その時の混乱はかえって大きくなる。

戦後のブレトンウッズ体制の下で、日本は1ドル360円の固定相場制を採用し、維持していた。1960年代に入ると、米国はベ

トナム戦争による戦費の増大などによるドルの流出、さらに貿易の赤字に苦しむようになった。日本は高度成長期を経て国際競争力が

高まり、貿易収支の黒字幅が拡大、外貨準備高が71年には急激に拡大していた。

そんな71年7月、小宮隆太郎・東京大学教授と天野明弘・神戸大学助教授（い

京都大学名誉教授 西村 和雄

ずれも当時）を代表幹事とする経済学者のグループが「円の小刻み切り上げ」を実施することを提言した。

急激な改革は「すくなくとも一時的にはさらに大きな無秩序を引き起こさずにはしばしば救済がたい、無秩序を導入する」（「国富論」水田洋監訳）のである。現在の中国は、70年代の日本の経験を参考にし、

きわめて現実的で有効と思われる提言であったが、政策当局は円の切り上げと変動制への移行に慎重な姿勢を変えなかった。

71年8月にはニクソン米大統領がドルの金交換停止を発表（ニクソン・ショック）、71年12月のスミソニアン協定で円の対ドルレートは1ドル360円から308円に切り上げられたのである。

急激な元の切り上げを避け、小刻みに切り上げているように思える。

今の日本に改革が必要なのは間違いない。しかし、既得権者は改革を避けたいので、先送りにする。先送りにすればするほど、混乱が大きくなる。早急な改革を前提としたうえで、いかに混乱を避けて改革をするかに英知を使うことを、過去の経験から学んでも良いのではないか。